

## 「環境ホルモン」

2018年01月20日

岩波の月刊誌『世界』の2月号に、NPO法人「ダイオキシン・環境ホルモン対策国民会議」理事の水野玲子氏が「“空騒ぎ”ではなかった環境ホルモン 負のスパイラルに陥る男性の生殖能力」を寄稿している。「環境ホルモン」についてはしばしば聞くことがある。体内に入って、内分泌に攪乱作用をする化学物質のことである。

1992年に英国BBCは「過去50年間で精子数が半減」というショッキングなニュースを放映した。このニュースが危機感を煽り、環境ホルモン問題がクローズアップされた。しかし、日本では「環境ホルモン“空騒ぎ”」と言われ、問題を鎮静化しようとする動きがあった。一方、欧米では熱心に研究が継続されていた。2012年にWHO/UNEP（国連環境計画）が「内分泌攪乱化学物質の科学的現状」の報告書を出している。それによると、過去数十年間に乳がんや前立腺がんなどのホルモン依存性がんが先進諸国で急増している。また、新生児の停滞精巣や尿道下裂、大人の精巣がんなどの男性生殖器の障害が増加の一途にあることなどが、数々の証拠で示された。

1998年に、イギリスの作家デボラ・キャドバリーが『メス化する自然』を著わし、オスがメス化する現象が野生生物に広がっている状況を知らせた。1997年に刊行されたシーア・コルボーンらの『奪われし未来』では、孵化しない卵、大量死する動物たちの衝撃的な報告を著わした。これらの現象は環境ホルモンによる攪乱ではないかと、社会的に注目を浴びた。この現象は野生動物だけでなく、人間にも浸透してきている。

幾多の研究論文が発表されてきた。精子数は50年前には、1mlあたり約1億個が普通であったが、近年は減少し、2010年のWHO（世界保健機関）の基準では正常参考値が1500万以上と改定されている。一般的には精子数が1500万を下回ると不妊の原因になり、5500万を下回ると受胎率に影響が出るとされている。日本では、結婚したカップルの5.5組に1組（18.2%）が不妊に悩み、検査や治療の経験がある。聖マリアンナ医科大学が参加した日欧の精子数に関する結果では、日本人男性はフィンランド人男性の3分の2しかなく、最も少ないと言われているデンマークとほぼ同数であったと報告されている。

「草食系男子」という言葉を、興味深く聞いた。荒々しい男性でなく、柔和で優しい男性に人気が出る時代になったのかと思った。「草食系」とは、女性への関心が強くなく、態度が控えめで、声が小さく従順な感じがあり、色白で筋肉質でない男性を指すらしい。数は少ないが、その若者たちのホルモン値を測定した結果では、30歳前後であるにもかかわらず、加齢男性ホルモン値以下を示す者が半数（47.6%）もあった。

環境省は日本人の血液や尿の中の化学物質を測定し、公表している。2016年の結果では、プラスチックの可塑剤のフタル酸エステル類、有機フッ素化合物などの環境ホルモン物質が全員から検出された。これらは、女性ホルモン作用を持つ物質で、精子数減少に影響を与える可能性が指摘されている。日本では、EUで禁止されている「抗男性ホルモン作用」を持つ農薬を大量に使用続けているため、男性生殖機能の低下がEUに比べて進んだとしても、不思議ではない。豊かで便利な生活を求め、化学物質に頼ったが、環境ホルモン研究の第一人者の米国ミズーリ大学のフォン・サール教授は、「男性不妊の負のスパイラルは、もはや食い止められない」と警鐘を鳴らしている。精子数の減少、男性生殖器障害の増加を、見えないところで進行させている環境ホルモン問題を直視しなければ、「不都合な真実」に押しつぶされる国になると、水野氏は危惧し、警告している。